

profile

やはた・ますみ●1983(昭和58)年生まれ、千葉県出身。大学院で機械工学を専攻し、修了後の2008年、鹿島建設株式会社に入社。機電担当者として現場に配属され、銀行や病院建設などの大型プロジェクトを数多く経験する。2017年10月からは鹿島技術研究所の先端・メカトロニクスグループに所属し今に至る。



初めて部下が出来た現場の機電グループの集合写真。右から順に機電長、八幡、新入社員、資機材担当者。

「初めて」ということは、好きにできるということ。周りの人の安全を守りたかったから。建物ができあがっていく過程を見るのが好きだったから。建設業を志したきっかけは人によって実様々だが、八幡はハッキリと「重機が好きだったんですよね」という答えを持っている。「フーバーダムって、ご存知ですか？ アメリカにあるダムで、海外に住んでいた幼い頃に両親に連れられて見に行ったんです。それがとても大きく、忘れられなくて。そんなすごいものをつくるための機械にも、次第に興味を持ちはじめたんです」

貯水量約三五二億トンの巨大ダム。その威容に魅せられながらも、それをつくりあげる機械のメカニズムに心惹かれて、大学院では機械工学を専攻した。製造業に就職する友人が多いなか、迷わず鹿島建設での機電系の仕事を選んだ。当時、建設業には女性が少ない上に、彼女のような専門職はなおさら少数。同社初の機電系女性社員として働くことになったが、迷いや不安はなく、むしろチャンスを感じていた。「学生時代から女性の少ない環境でしたし、初めてってことは前例がないってこと。つまり『好きにやっていたいんだ』と。ポジティブに捉えていました」

「初めて」ということは、好きにできるということ

鹿島建設(株)初の女性「機電」担当者として、前例のない道を自ら切り開いてきた八幡真純さん。現場勤務を経て、今は機電系の研究員として、技術研究所において会社の最先端技術を背負うポジションに立っている。彼女は日々、どのようなことを目指して働いているのだろうか。

社員として働くことになったが、迷いや不安はなく、むしろチャンスを感じていた。「学生時代から女性の少ない環境でしたし、初めてってことは前例がないってこと。つまり『好きにやっていたいんだ』と。ポジティブに捉えていました」現場には何も残らない。でも、誰からも必要とされる仕事

入社後八幡は、機電担当として建築現場に配属された。機電系の社員は、工事で使用するすべての機械の手配や施工計画の立案などを担当する。現場監督とは異なり、機械の専門家として建設機械の運用を取りまとめ、施工計画を支える仕事である。「工事用エレベーターなどの大型機械の稼働は工事の進行に大きく影響します。選定から設置、運用、撤去までの計画はとても大切なんです」。更に仮設の電気や給排水設備の管理など業務は多岐に渡り、現場には欠かせない存在だ。

「現場監督だったら、自分の仕事を形にする実感がありますよね。私たちの仕事は逆で、建物の完成と同時に、機械は現場からなくなり『何も残らない』のが仕事なんです」

でも機械がなければ工事は進まない。現場から必要とされることに、彼女は仕事の大きな意義を感じ自信につながっていた。「現場時代の印象に残っていることはたくさんあります。笑えないくらいトラブルもハッキリと思いつ

輝け! けんせつ小町

機電

八幡真純

鹿島建設株式会社
技術研究所 先端・メカトロニクスグループ
研究員



「けんせつ小町」は、日建連が定めた建設業で活躍する女性の愛称です。



my Beginning 私が建設業界に入った理由
重機も、機械も大好き!

上／チームのなかでは、八幡もまだまだ若手。撮影中も、多くの人から温かい声を掛けられていた。前列左から2番目が岡担当部長。

右下／高所作業車の点検（現場時代）。「現場にある機械は私が責任を持って管理していました」。

左下／毎年開催されているクレーン安全大会で、発表をする八幡。「他社ゼネコンの方とも交流を深めることができ、今の開発業務にも役立っています。人のつながりの大切さを感じました」。



効率化や見える化。ロボットを生かせる環境とはどのようなものか。チーム内では活発に議論が行われる。

my Growing

私が建設業界で学んだこと

トライアンドエラーで、挑み続ける

せるし、もちろん勉強もたくさんしました」

新人社員だからと甘ったれるなど叱られたこともある。部下に委ねた仕事の進捗確認を怠って大きなミスにつながり、現場中を謝罪して回ったこともある。そんな失敗を乗り越えたからこそ、今の自分があるのだと八幡は振り返る。

「現場において、実際に職人さんの仕事ぶりを注意深く観察し学んだことによって、彼らのサポートをしていくには何が必要だろうか、今も真剣に考えています」

失敗の積み重ねが自らを成長させる

現場経験は約一〇年。その後八幡は、二〇一七年より技術研究所の勤務となった。建築現場に使用する重機や機械を自動化していくことが、現在彼女に課されたミッション。彼女自身のやりがいや周囲からの期待も大きい最先端の領域だ。

「自動化により効率化できる作業や、導入した機械を実際に使う職員や職人さんがどんな使い方をするのか、現場にいたのでよくわかります。この経験や感覚を生かし、人間とともに働きサポートしてくれる機械をつくりたいと考えています」

現状の仕事を少しでも楽に、安全にしてくれる誰もが理解しやすい簡単な操作で運転できる機械を実現するために、現場目線に立ちながら八幡は日々研究に励んでいる。たゆまず続く試行

錯誤の日々について、彼女は次のように語る。

「現場にいた頃とは、姿勢は真逆ですね。現場では失敗は許されません。失敗すると多くの人に迷惑を掛けてしまうから。一方で研究は、トライアンドエラー。実験を失敗すると、なぜダメだったのか、次はどう変えてみようかと、考えることが大事なんです。そうした積み重ねが、研究成果につながるんです」

自分の研究成果を携えて、自分の現場をつくってみたい

つい最近、研究に携わったロボットが現場に導入されたという。研究の賜物ではあるが、いざ運用を始めると、きちんと使えたか、よいものだったか、不安にもなった。

「大丈夫かなという思いがすごくあったんですが、導入先から『思っていたよりもいいね』と言ってもらえたり、まだ機械を使用していない現場からは『うちも使ってみよう』と声を掛けてもらったり。研究所で働いていながらも、現場にいた頃のように声を掛けてもらえるのは、非常に励みになります」

熱心に仕事をする八幡には、上司である岡担当部長も、注目しているという。

「細かいことですが、彼女はいつもきちんとメモをとるんですよ。真面目な性格が表れていますね。この真摯な姿勢があるので大丈夫。活躍を楽しんでいます」



建築、機械、プログラムなど様々な専門書を読み込み、知識を身に付けることは研究には欠かせない。

my style

身長が低いので、なかなか取れなかったバイクの免許を、時間を掛けてついに取得！ 10年越しの想いが実りました。本当に嬉しくて、今は毎週のようにツーリングへ。今年のゴールデンウィークは3泊4日で東北地方を一周するなど、満喫しています。



ゴールデンウィークに岩手県浄土ヶ浜での1枚

八幡自身は、今後研究所内でどのようなキャリアを積んでいきたいのだろうかと思ねると、「ゆくゆくは、現場に戻りたいんですよ」と真っ直ぐな気持ちを伝えてくれた。

「今携わっている研究を成功させたい気持ちはもちろんあるし、ここでの仕事は非常にやりがいのあることです。でもやっぱり現場が好きなんですよね。だから願わくば、ここで大きな成果を上げて、つくった機械を引っ提げてまた現場に行きたいです」

八幡は今日も、大好きな重機の新たな可能性を切り開き、工事を支えるために試行錯誤を繰り返す。その積み重ねのなかで、未来の現場を変えていく技術を追及しているのだ。

my **Growing** 私が建設業界で学んだこと